マウラーナー・シャイフとして知られる弟子 編著、川本正知 訳注『15 世紀中央アジアの聖者伝 ホージャ・アフラールのマカーマート』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2005 年、xxiii ＋ 155 頁

「ホージャ・アフラールのマカーマート」こと『マカーマーテ・ホージャ・アフラール *Maqāmāt-i Khwāja Aḥrār*』（以下、『マカーマート』）は、ティムール朝治下の中央アジアに活躍した、ナクシュバンディー派のシャイフ、ホージャ・アフラール Khwāja Aḥrār（1404-1490）の奇蹟譚や言行を集めたものである。より厳密に言えば、その奇蹟譚や言行に関する諸人（編著者含む）の回想・伝聞を中心的な内容としながら、彼の親族・弟子たちに関する様々な逸話をも併録する。原文はペルシア語である。編著者のマウラーナー・シャイフ Mawlānā Shaykh は、川本氏によれば、ホージャ・アフラールの弟子の一人で、ヒジュラ暦 915 年（1509 年 4 月 21 日に始まる）の間に起こったサマルカンドの大火を『マカーマート』に記録した後、1510 年 12 月までに亡くなった、と推定されるという［川本 2004: xvii］。ただし、マウラーナー・シャイフの手に成ったのは、ホージャ・アフラール及びその親族・弟子たちの様々な逸話に関する、マウラーナー・シャイフ自身の覚書や諸人の回想・伝聞の取材メモを、漠然と三部構成にまとめただけの、書名・序文・後書きのない草稿であって、『マカーマート』が「一書として編纂された」のは、マウラーナー・シャイフ没後、彼の草稿に序文を付した何者かの手によってである、という［川本 2004: xvii］。なお、この点については後でも論じることになる。

『マカーマート』の原本はすでに失われているが、川本氏は、現存する５写本をつき合わせて作成したペルシア語校訂テキスト［川本 2004］を、本書に先立って上梓している。その以前に既にアーレフ・ナウシャヒー氏による校訂[1] も出ていたが、川本氏によれば、２写本しか参照していないそれは、問題が多いという［川本 2004: xxiv-xxv］。従って［川本 2004］は、現時点で最も多くの写本を参照した『マカーマート』の最良の校訂ということになる[2]。本書は、その校訂テキストに基づく『マカーマート』の日本語による訳注である。それは、『マカーマート』という一個の史料へのアクセスを容易にしたにとどまらず、日本語で読める数少ないイスラーム聖者伝[3] の一つとしても注目される。以下では、本書を［川本 2005］と称し、［川本 2004］とあわせて評したい。

両書それぞれの目次は以下の通りである。

［川本 2004］：略語、英文凡例、序文、凡例、解題（１.著作名、２.写本、３.刊本、４.編著者、５.構成、６.成立）、ペルシア語テキスト、人名索引、地名索引、民族名・部族名索引

1） ʻĀrif Nawshāhī (ed.), “Khawāriq-i ʻĀdāt-i Aḥrār”, in *Aḥwāl wa Sukhanān-i Khwāja ʻUbayd Allāh Aḥrār*, ed. by ʻĀrif Nawshāhī, Tehran: Markaz-i Nashr-i Dāneshgāhī, 1380 A.H.S. [2001-2], pp.573-705.

2） ホージャ・アフラールの聖者伝は、『マカーマート』以外に刊本が出ているものとして、Fakhr al-Dīn ʻAlī b. Ḥusayn Wāʻiẓ Kāshifī の *Rashahāt-i ʻAyn al-Ḥayāt*（Fakhr al-Dīn ʻAlī b. Ḥusayn Wāʻiẓ Kāshifī, *Rashahāt-i ʻAyn al-Ḥayāt*, ed. ʻAlī Aṣghar Muʻīniyān, 2 vols., Tehran: Intishārāt-i Bunyād-i Nīkūkārī-yi Nūryānī, 2536 [1977] . 全体はナクシュバンディー派スーフィーの聖者伝であるが、後半――当該刊本第二巻相当部分――にホージャ・アフラールとその親族・弟子の伝記を扱う）と、Mīr ʻAbd al-Awwal の *Majālis*（ʻĀrif Nawshāhī(ed.), “Malfūẓāt-i Aḥrār ba-taḥrīr-i Mīr ʻAbd al-Awwal Nīshābūrī”, in *Aḥwāl wa Sukhanān-i Khwāja ʻUbayd Allāh Aḥrār*, ed. by ʻĀrif Nawshāhī, Tehran: Markaz-i Nashr-i Dāneshgāhī, 1380 A.H.S. [2001-2], pp.141-494.）がある。加えて、写本のままのものも数種類が知られている。詳細は、［川本 1986; 川本 2002; 川本 2004: xxix-xxx］を参照。

3） 他に、イスラーム聖者伝の古典的名著 Farīd al-Dīn ʻAṭṭār の *Tadhkira al-Awliyā'* を日本語で抄訳した［藤井 1998］や、東トルキスタンで書かれた数種の聖者伝のチャガタイ語テキストとそのうちの二編の日本語による訳注を収録した［濱田 2006］がある。

［川本 2005］：略語、序文、凡例、解題（1. ホージャ・アフラールの誕生、2. 修行時代、3. 資産、4. 死）、『ホージャ・アフラールのマカーマート』訳注（第1章 諸奇蹟の叙述、第2章 イーシャーン様の親族の話、第3章 イーシャーン様の教友たちの話と高貴なる集会で著者が聴いたいくつかのお言葉）、人名索引、地名索引

両書にはすでに、今松泰氏による書評［今松 2006］が存在する[4)]。同評で両書の「解題」の内容が簡明かつ十全に紹介されている。従って本評では、両「解題」については若干のコメントを加えるに止め、［川本 2004］の「ペルシア語テキスト」と［川本 2005］の「『ホージャ・アフラールのマカーマート』訳注」に拠りつつ、『マカーマート』が歴史資料として何を語るかという問題、ひいては［川本 2004］並びに［川本 2005］の有用性・出版意義について検討することを主な課題としたい。

『マカーマート』は、実に内容豊富な史料である。それによっては、ホージャ・アフラール及びその親族・弟子に関する貴重な情報を数多く引き出せるだけでなく、15・16 世紀の中央アジアにおける社会の状況や、イスラームの信仰・実践の有様を窺い知ることもできるだろうし、さらには当該時空の人々の思考パターンや精神といったものに触れることもおそらく可能であろう。またそれ以外の様々な関心にも応えうるだろう。こうした『マカーマート』の魅力を、ほんの一部でも伝えることができたならば、そうして川本氏の両大著に対する読者諸氏の興味を刺激することができたならば、評者の目的は達成されたことになる。

Ⅰ ［川本 2004］の「解題」について

［川本 2004］の「解題」で解説されるのは、『マカーマート』の本来のタイトルは何であるかという問題、現存する5写本の特徴、川本氏の校訂の方針、アーレフ・ナウシャヒー氏による校訂の問題点、『マカーマート』の編著者は何者であるかという問題、同聖者伝の構成、成書の経緯、同書の特徴や史料価値などである。そこでの議論は、今松氏が評したように、まことに堅実・明快である。ただ、次の一節については若干の疑問が残る。すなわち、「著者の死後、書名もなく序文も後書きもつけられていなかったこの草稿（マウラーナー・シャイフの手に成った『マカーマート』の草稿――評者注）が、冒頭の短い序文を書いた人物によって一書として編纂された。短い序文におけるマウラーナー・シャイフに対する祝福句は故人に対するそれである。1510 年頃のことであろう」との一節［川本 2004: xxix］である。

ここで川本氏は、『マカーマート』が「一書として編纂された」のは、「1510 年頃のことであろう」と述べている[5)]。『マカーマート』の成書が、1510 年 12 月までに亡くなったと考えられるマウラーナー・シャイフの没後すぐのことであったとの推測によるのであろうが、その根拠は特に示されてはいない。しかし、いずれにせよ、氏が参照した5写本のうち最も古い T1 写本が、早ければ 1512 年以後、より妥当なのは 1533 年から 1540 年の間に作成されたと考えられる［川本 2004: xx］ことから、遅くともそれまでに『マカーマート』が「一書」として成立していたということは、動かな

4） また、ドイツ語による簡単な紹介として［Knüppel 2008］がある。

5） ［今松 2006: 108］では、［川本 2004］の「解題」の内容を紹介する中で、『マカーマート』が「一書として編纂された」時期を「1520 年頃」と記すが、「1510 年頃」の誤りである。

いのだろう。

ただし、マウラーナー・シャイフの没後からT1写本作成までの間に、『マカーマート』が「一書」と成っていたとは言い得ても、それが「冒頭の短い序文を書いた人物によって」成ったとは言い切れないのではなかろうか。というのも、その時点ですでに序文が付せられていたかどうかは定かでないからである。川本氏によれば、T1写本の、序文（１葉裏）を含む１葉から６葉は、後代の写本（1574-1575年に作成されたI写本）から補われたものだといい［川本2004: xx］、T1写本にもともと序文が存在したかどうかは不明なのである。なお、序文の存在が確認できる最も古い写本は、1561-1562年に作成されたP写本である。

II ［川本2005］の「解題」について

［川本2005］の「解題」では、読者の訳文理解を助けるために、ホージャ・アフラールの誕生、修行時代、莫大な財産、死といった主題が、主に聖者伝『ラシャハート』（Fakhr al-Dīn ʻAlī b. Ḥusayn Wāʻiẓ Kāshifī（1504-05年没）の *Rashaḥāt-i ʻAyn al-Ḥayāt*）の記述に依りつつ解説され、さらに『ラシャハート』と『マカーマート』の記述形式面における相違が指摘されている。それによれば、『ラシャハート』におけるホージャ･アフラールの死に関する記述には、「日時や地名を正確に述べ、客観的事実を伝えようと」する傾向が看取され、そこに「引用」されている回想にも編纂者の手が加わっていることが疑われるが、そのような回想は『マカーマート』の中に見出されず、「『マカーマート』の中の回想は、むしろ主観的、すなわち、語り手が事件をどのように捉えたかに重点が置かれている場合が多」いという。そして､この相違の生じた理由は､川本氏によれば､『マカーマート』の編纂の経緯と形式に求められるという。すなわち『マカーマート』は､「編著者によってホージャ･アフラールに関する聖者伝を編むために集められた様々な「一次資料」が、編著者の死後、状況説明を書き加えることによって逸話の意味を明確にしていくといった聖者伝編纂に必要な作業をほとんど経ることなく一書として書き写されてしまった」ものだと言うのである。

たしかに『マカーマート』には、編纂作業の中途半端さが目立つ。『マカーマート』収録の様々な逸話は、大きく三つのセクション――（１）「第１章 諸奇蹟の叙述」（ホージャ・アフラールの奇蹟に関する逸話）、（２）「第２章 イーシャーン様の親族の話」（ホージャ・アフラールの親族・弟子たちに関する逸話）、（３）「第３章 イーシャーン様の教友たちの話と高貴なる集会で著者が聴いたいくつかのお言葉（ホージャ・アフラールの法話）――に分類され、さらに各セクションの内部においても、共通点を持つ逸話同士をまとめて配置しようとする気配はある[6]が、近似の逸話同士をまとめる作業は徹底されていないようである。［川本2005: 48(n.100)］で指摘されるように､ホージャ・アフラールに刃向かったシャイフ・アル＝イスラーム ホージャ・マウラーナーの悲惨な末路に関する一連の話［川本2004: 44-49; 川本2005: 45-49］[7]の間に、全く関係のない逸話が挿入されているのはその一例である。

しかもその挿入された逸話は、シャイフ・バハー・ウッディーン・ウマルの息子が、ホージャ・アフラールは我が父に多くの質問をしていたと驕り侮ったのに対し、アミール･ユースフ･アッター

6） 第１章では、語り手や登場人物を同じくする話同士（例えば、「献身的な弟子の一人」が「インド人力士」から伝え聞いた話の後に、「インド人力士」が登場する話が続き、さらにまた「インド人力士」の回想が続いている［川本2004: 24-26; 川本2005: 24-26］）や、奇蹟譚の内容が似通っている話同士（例えば［川本2004: 35-38; 川本2005: 36-39］には病気治癒の奇蹟の逸話が３つ連続して出てくる）といった具合にまとめられている。従って時系列はほとんど意識されていない。例えば、ホージャ・アフラールの生前・死後の話が交互に出てきたりする。

7） ［川本2005: 45(n.97)］に、ホージャ・マウラーナーについては、注49参照とあるが、注40参照の誤りであろう。

ルは、ホージャは他にも多くのシャイフたちに質問していたと反論した、という内容である。それは「第１章 諸奇蹟（khawāriq-i ʻādātī）の叙述」の内にありながら、いわゆる奇蹟[8]とは全く関係がないように見える。ホージャ・アフラールの奇蹟譚のセクションには、それ以外にも、同様に奇蹟譚とは呼びえない逸話があと二つほど見受けられる[9]。これらは奇蹟譚の断片なのであろうか。あるいは奇蹟譚へと仕立て上げられる予定であった、まさしく「一次資料」と呼ぶべき、編著者マウラーナー・シャイフの覚書や取材メモの類が、『マカーマート』成書の際、そのまま収録されてしまったものなのだろうか(だとすれば非常に興味深いのだが)。いずれにせよ、『マカーマート』が、それら「一次資料」を、あまり加工せぬまま取り急ぎ一冊にしたものであるとする、川本氏の見解を強く肯定するであろう[10]。

また、［川本 2005: 109(n.109)］で指摘されるように、『マカーマート』の中のある逸話は、他の逸話と異なる文体で記されており、既存の文章を借りてそのまま掲載したもののようであるが、このことも、川本氏が考える『マカーマート』の編纂事情と親和的である。

ところで、『マカーマート』が編著者マウラーナー・シャイフの覚書や取材メモの類をほぼそのまま収録したものであったとすれば、『マカーマート』において、テュルク系の人間の台詞が時にペルシア語に翻訳されずにテュルク系の言語で綴られている［川本 2004: 24, 43, 128-129; 川本 2005: 24, 44, 125］ことは、興味深い。というのもそれは、編著者のマウラーナー・シャイフが人々から聞いた奇蹟譚をできるだけ聞いた通り草稿に起こしていた、そしてそれがそのまま『マカーマート』に収録された、という想定を許すからである。だとすれば『マカーマート』は、人々の「生の声」を高度に保存した、歴史資料として極めて優秀な文献ということになる。

III 『マカーマート』は歴史資料として何を語るか

『マカーマート』には、ホージャ・アフラールの生前・死後にかかわらず、彼を蔑ろにしたり彼に仇なしたりした者が突如として死んだとか、もしくは悲惨な末路を辿ったなどという話がよく出てくる。語り手は大体がホージャ・アフラールの弟子や信奉者たちである。はっきりと言葉に表されているわけではないが、いずれの話も、「罰当たりども」の死は偶然の不幸ではなく、怒れるホージャの超常の力による必然の報いであった、といったところがその趣旨であろう。そしてその手の

8）『マカーマート』第１章の表題に見える「諸奇蹟（khawāriq-i ʻādātī）」とは、直訳すれば、「習慣を切り裂くもの」の意である。これを「諸奇蹟」と意訳し得るのは、次のような考え方による。すなわち、諸現象の間に因果関係や物理法則が認められるのは、神が自らの習慣に従って瞬間瞬間に現象を創造しているからであるが、万能の神がその習慣を破ることで、原因のないような結果、物理法則を無視したような現象、つまり「奇蹟」が起こる、という考え方である。

9）一つは、ホージャ・アフラールへの不作法から追放されていたダルヴィーシュ・サッカーが、ホージャを慕う旨の言葉を告げたことで再び奉仕を許された、という逸話［川本 2004: 43-44; 川本 2005: 45］。
　もう一つは、ミールザー・スルタン・アフマドがホージャ・アフラールの許にダルヴィーシュ・アミーンを使わせて、アミール・ユースフはホージャ・アフラールに仕える人々の悪口など言っていないと弁解させた（それで、アミール・ユースフに中傷されたと思い込んでいるある人物との仲を取り成すよう依頼したのであろう）のに対して、ホージャ・アフラールは「そのようになるでしょう（望むとおり仲裁は成るでしょう、との謂いか？）。ただし――我ら神にお縋り申す、貧者の心が誰かに対する拒否に拠って立つことのなからんことをと――いざそういうこと（貧者の心が誰かを拒否すること）が起こってしまいますと、もう誰も仲裁に入ることはできないですよ」（川本氏の訳文を若干改変）と応じた、という逸話［川本 2004: 57; 川本 2005: 57］。

10）ただし、「一次資料」が三部構成に仕分けられた以外にも編纂の跡がないわけではない。例えば、第３章で「教友たちの話」の部分の最後（「高貴なる集会で著者が聴いたいくつかのお言葉」の部分との間）に、ホージャ・アフラールは「私の教友たちは、星のごとくおり、彼らの中の誰でも、あなたたちは模範とし、従いなさい」というハディースの例証である、との編集句が見える［川本 2004: 109; 川本 2005: 105］。また、［川本 2005: 106 (n.156)］で指摘されるように、「高貴なる集会で著者が聴いたいくつかのお言葉」の部分の冒頭には、当該部分の前書きよろしく、ホージャの法話が記録されるようになった縁起を説明するような逸話が配されている。

話の中でも比較的多いのが、ティムール朝のアミール（テュルク系軍人支配者層）たちが、シャリーアに反する臨時税の類を徴収しようとした途端に死ぬ、といった類の話である。シャリーアの守護者を自認したことで知られるホージャ・アフラールへの敵対行為を戒めるかのような、これらの逸話をはじめとして、『マカーマート』に収録される神秘的報復譚の数々は、実に、彼やその弟子たちがアミールたちの収奪に対してどのように対処していたかを生々しく伝える貴重な史料として注目に値する。以下では、『マカーマート』の史料価値を、ごく一部でも明らかにしようとの意図から、それらの逸話のかかる史料性を検証すべく、実際にそれらの逸話を史料としてスーフィーたちの対アミール戦略の具体相を描き出してみることにしたい。そこで、ホージャ・アフラールが自らの神秘的な力を示すことにより圧政者たちに掣肘を加えようとしていたことは、［川本 1986］などでも夙に指摘されているところではあるが、まずはこの辺りから見ていくことにしよう。

さて、ある逸話［川本 2004: 22-23; 川本 2005: 22］によれば、ホージャ・アフラールは、ウマル・シャイフ・ミールザーの不法な課税を思い止まらせるために、ウマル・シャイフと親交のあった自身の従兄弟のマウラーナー・アブド・アルワッハーブに向かって次のように言ったという。

> 行って、ウマル・シャイフに言いなさい。もしも、彼がこの考えや企てを放棄するならば、彼は〔何事もなく時を〕過ごしていくだろう。さもなければ、私は彼を殺すと。アブー・サイードやクバードやマリク・イスリームやムハンマド・ハーザンなど皆私が殺した者たちである。ほかにも何人か殺しているので、墓地を通り過ぎることに後ろめたさを感じるほどである。

もちろんここで言われるアブー・サイードやクバードやマリク・イスリームやムハンマド・ハーザンの「殺害」は、ホージャ・アフラールが物理的に手を下したのではなく、彼の超能力によって惹き起こされたものである。この逸話からは、最終的にウマル・シャイフが課税の意思を放棄したか否かは分からない。が、ホージャ・アフラールが自らを恐るべき力の持ち主としてアピールすることでアミールたちに畏怖の念を起こさせ、彼らの横暴を阻止しようとしていた様を如実に知ることができるであろう。

それにしても上の台詞は、なかなか凄みが効いている。「殺し」の履歴を披露しながら、白々しく「後ろめたさを感じる」と嘯くことで、むしろちょっとやそっと殺したぐらいでは何とも思わないし、お前ごときを逝かせることなど造作もないという恫喝のニュアンスを、効果的に表現している。ホージャの「実績」を少しでも知る者であれば、たとえそれまではホージャの超能力を真に受けなかったとしても、いざそのように犠牲者を列挙されて今度は自分だと言われると、潜在的な恐怖が頭をもたげ、怖気づくことがあったかもしれない。だが逆に、ホージャによる報復の実例を全く知らない相手にとっては、せっかくの脅迫もさほどインパクトがあったとは思われない、いやむしろ妄想か虚言にしか聞かれなかっただろう。少なくとも問題の台詞は、「アブー・サイードやクバードやマリク・イスリームやムハンマド・ハーザン」の横死をもたらしたものが何であったのかが、相手のウマル・シャイフに知られていることを前提にした言い回しなのである。

果たして『マカーマート』に見える、件のアブー・サイード「殺害」の逸話［川本 2004: 19-20; 川本 2005: 19］からは、クバード、マリク・イスリーム、ムハンマド・ハーザンがホージャ・アフラールの不思議な力によって殺されたという話がかねてより人口に膾炙していたことを窺える。すなわち、アブー・サイード（サマルカンドのハーキム）が、ホージャ・アフラールを中傷した際、スルタン・アブー・サイード・ミールザー（ティムール朝の統一君主）が次のように諌めたとある。「アブー・サイードよ、クバードやマリク・イスリームやムハンマド・ハーザンやその他の私の多くの優れた部下たちが、イーシャーン様に従う者たちに逆らって、いろいろなことを言ったが、彼らは

皆破滅してしまった。お前も私の優れた部下の一人だ。私は、お前に、こういったことを言うことを止めさせなければならぬ。さもなければ、お前は死ぬ」と。クバードやマリク・イスリームやムハンマド・ハーザンがホージャ・アフラールへの敵対の報いを受けて死んだことは、この時点ですでに周知の「事実」だったと見える。また、この忠告を聞かず二日後に奇病で逝ったとされるアブー・サイードの話も、やがてはホージャの復讐譚として人々の語り草となっていたことであろう。

疑いなくホージャ・アフラールは、自らの報復劇の数々をウマル・シャイフが耳にしていることを前提に、あの脅し文句を吐いていたはずである。そこからは、すでに周知の「事実」となっていた自身の「実績」に言及することによって、ウマル・シャイフに潜在する恐怖に訴えようという、ホージャ・アフラールの計算が透けて見える。いや、その奥の更なる算段を疑ってよいかもしれない。すなわち、そもそもホージャ・アフラールの復讐譚を事前に人々の間に流布させておいたのは、ホージャ自身、それに彼の弟子たちだったのではないかと。つまり、彼らは常日ごろよりホージャの逆鱗に触れた者たちの末路を吹聴することによって、恐怖の種をばら撒いておき、ここぞという時の恫喝の便に供していたのではないか、またはそうやってホージャの力の大いなる様を鼓吹することで、アミールたちに畏怖の心を芽生えさせ、その跳梁を未然に抑止する効果を期待していたのではないかと。

例えば『マカーマート』のある逸話には、ホージャ・アフラールが、物故した弟子たちの墓を前にしながら、生存する弟子たちに向かって次のように言うシーンが出てくる。「この人たちはあなた方のように私への奉仕をしていたが、僅かな〔私への〕不作法によって、皆逝ってしまったのだ」と［川本 2004: 48-49; 川本 2005: 49］。弟子たちに対する発言ではあるが、ホージャが平素より折に触れて自らの異能を誇示していた雰囲気は伝わってくる。加えて、『マカーマート』収録の数々の逸話こそは、ホージャやその弟子たちがホージャの奇蹟をまことしやかに語るところを記録したものであり、ホージャの超能力者ぶり、とりわけその報復の恐ろしさを戦略的に語り広めるという営為の記録なのではあるまいか。

なお、『マカーマート』において、ホージャ・アフラールの報怨を被ったとされるのは、ティムール朝のアミールたちのみではない。ホージャにあからさまに敵対したシャイフ・アル＝イスラームのホージャ・マウラーナーや、ホージャに不作法を働いた弟子たちについてはすでに触れた。その他、ライバル関係にあったと思しき他流派・他系統のシャイフをはじめ、果ては幼い甥たちまで、ありとあらゆる「敵」が葬り去られたと物語られている。彼らの受難の逸話もまた、アミールたちの心胆を寒からしめるのに一役買ったであろう。

さらに興味深いことに、『マカーマート』の神秘的復讐譚の数々は、ホージャ・アフラールに仇なした者たちの現実の病死や戦死といった見た目の事象の背後に、「真相」として、ホージャの力が作用していたことを示唆するという構造を典型とする。この構造は、ホージャやその弟子たちが、圧政者をはじめとする敵対者たちの不慮の死を利用して、奇蹟譚を「創作」していたことを疑わせよう。ただし、そうだとしても、彼らにはっきりとした「捏造」の意識があったかどうかは定かでない。現実事象の背後に働く聖者の力をほとんど無意識に認めるような精神構造が、当然のことのように奇蹟の存在を「感得」していただけなのかもしれない。

例えば、先にも登場したクバードとマリク・イスリームの話［川本 2004: 23; 川本 2005: 23］を見てみよう。二人はスルタン・ヴァイスの反乱に対してタシュケントの守備に派遣されてきた際、ホージャ・アフラールの教友たちに無礼を働いた。これを聞いたホージャ・アフラールは「もしも、彼らの首を公衆浴場のバラーシャーベ balāshābe（［川本 2005: 23(n.49)］に言う通り、発音・意味と

もに不明――評者注）の中に見ないとしたら、何としてくれよう」と言った。果たして数日後、スルタン・ヴァイスはタシュケントを攻め取り、彼ら二人を殺してその首をバラーシャーベに投げ入れた。このクバードとマリク・イスリームの戦死の話が奇蹟譚として聞かれうるのは、二人の首を「バラーシャーベ」の中に見ることを欲する旨の、ホージャ・アフラールの呪詛とも取れる、予言的発言によるところが大きい。この予言的発言が後付の「創作」だった可能性は十分ある。しかしたとえそうであったとしても、つまりホージャの呪詛が実際には無かったことであったとしても、ホージャ・アフラールの怒りを買ったクバードとマリク・イスリームが都合よく戦死したことは、聖者の力を信じて疑わぬ者にとってみれば、その背後にホージャの神秘的干渉があったことを想起させずにはおかぬ事件であったに違いない。ただし、このようにホージャの奇蹟の発動を背後にそこはかとなく感じさせる現象も、奇蹟譚として流布される段になれば、誰が聞いても奇蹟譚と分かるように多少の潤色が施されることもあっただろう。おそらく、ホージャ・アフラールとその弟子たちは、無意識に奇蹟を発見し、確信犯的にそれを語り広めていたというのが、実情だったのではなかろうか。

また、『マカーマート』に泉下のホージャ・アフラールによる報復の逸話が存在するということからは、そうした営為が、ホージャの死後も弟子たちによって継続されていたことを窺える。例えば、ホージャ・アフラールが亡くなるや、それまでの恭謙の姿勢から掌を返すようにその私有財産の土地に課税したアミール・アブド・アルアリーなる人物が間もなく奇病で逝ったという話［川本 2004: 13-15; 川本 2005: 12-14］や、「高貴なるホージャ様の存在が、諸地方を取得することの妨げであったのだ。さもなければ、今日までにこれらの地方の獲得が可能になっていたであろう」などと言ってホージャの農地に課税しようとした連中が直後の戦で惨敗したという話［川本 2004: 11-12; 川本 2005: 9-11］などがそれである。しかも、これらの逸話からは、ホージャ・アフラールの死を契機に、もはや畏れるべきものなしと見て、それまでは指をくわえて眺めるだけであった彼の私有財産に手を出そうとした輩が沢山いたであろうこと、のみならずその他各種の苛斂誅求が激しさを増したであろうこと、一方、残された弟子たちは活発化する不良アミールたちに今まで以上の対応を迫られるようになっていたであろうこと、従って彼らはホージャの生前よりもむしろ精力的に彼の奇蹟譚の流布に力を注いだであろうことを推測しうるのではないか。案外『マカーマート』の記事は、彼らがホージャ・アフラール没後の難局を乗り切るために、今は亡き怒れる聖者の生前の暴れぶりや、幽冥界に荒ぶる聖者の死してもなお力衰えぬ様を喧伝していた、その最中を記録したものであったかもしれない。そして『マカーマート』の編纂自体も、同種の宣伝活動の一環として理解することができるかもしれない。

以上、『マカーマート』収録の神秘的報復譚によって、ホージャ・アフラールやその弟子たちがアミールたちの専横を抑止するために採っていた戦略がどのようなものであったかについて探ってきた。大胆な推測を交えながらも、その具体相をかなりの程度まで窺うことができたと同時に、当該問題をめぐって『マカーマート』が如何に豊かな情報源となりうるかをも示すことができたと思う。

なお、上に見てきたような、スーフィー聖者の神秘的な力を鼓吹することで政治的支配者を牽制するという戦略は、スーフィーたちの威信を高め、その政治的地位を押し上げることにも貢献したであろう。とすれば、東トルキスタンにおけるカシュガル・ホージャ家の「神聖国家」樹立を頂点とする、ナクシュバンディー派スーフィーの政治的成功を考える上でも、それは重要な事柄であると思われる。従って、例えば、ナクシュバンディー派スーフィーの政治的台頭の過程にホージャ・

アフラールを位置づけようとするような場合にも、『マカーマート』は有益な、というよりもむしろ必見の史料となるはずである。

IV　訳文について

本評の目的からは外れるが、［川本 2005］の訳文について、［川本 2004］のペルシア語テキストに照らして訂正しうる点を、幾らか指摘しておきたい。以下、箇条書きで列挙してゆく。

・［川本 2005: 5］に「〔所有の〕全ての農地にもかかわらず、ホージャは自由で孤高であられるのは不思議なことだ。それら全てと彼の間に、また、彼とそれら各々との間に何もないのだろうか」とあるが、「〔所有の〕全ての農地にもかかわらず、ホージャは自由で孤高であられるのは不思議なことだ。この全ては彼とともにあるが、彼はこの何れとも共にはないのだ」といった具合に訳すべきだろう（修正箇所に下線を付した。以下同じ）。

・［川本 2005: 11］に「イーシャーン様――神よ、彼の高貴なる秘密を清めたまえ――の魂から、私に、私がイーシャーン様の言葉に従って行動していないとのことが伝えられるのは〔私にとって〕辛いことであったが、シャーフルヒーヤの獲得以降には、罰当たりによって〔ホージャに対する〕不当な言葉が発せられていたのだ」とあるが、「これ（ミールザー・スルタン・アフマド軍の敗退）は、イーシャーン様――神よ、彼の高貴なる秘密を清めたまえ――の魂から、我らに課せられた責め苦（bār）である。というのも、我々はイーシャーン様の言葉に従って行動せず、シャーフルヒーヤの獲得以降にも一部の罰当たりどもによって〔ホージャに対する〕不当な言葉が発せられていたからである」といった具合に訳すべきだろう。

・［川本 2005: 22］に「〔ホージャ〕は私に「〔お付の〕人々に、「私にはマウラーナー・アブド・アルワッハーブに話したいことがあるのだが、私が言ったことを誰にも聞かれないように、近くに来ないように言ってくれ」と言われた。こう言いながら進んでおられた時、突然、遠くの方から一匹の鹿が現れた」とあるが、「〔ホージャ〕は私（マウラーナー・ヒラール）に“〔お付の〕人びとに、‘私にはアブド・アルワッハーブと〔内々に〕話したいことがあるので、私に近寄るな’と伝えてくれ”と言われた。私はそう言ったが、誰も気づかなかった。〔ホージャとアブド・アルワッハーブは二人きりになれずに〕そのまま進んでいると、突然、遠くの方から一匹の鹿が現れた」といった具合に訳すべきだろう。

・［川本 2005: 28］に「イーシャーン様とイーシャーンの信奉者の慣習は、様々な徴候や出来事について夢解釈を行うことであったのだが」とあるが、「イーシャーン様とイーシャーンの信奉者の慣習は、様々な心象や幻夢（mukāshafāt wa wāqi‘āt）を解釈することであったのだが」といった具合に訳すべきだろう。

・［川本 2005: 68］に、「また、〔前節の語り手の教友は〕次のように語った」と始まる一節は、川本氏の訳だとごく一部だが意味の通らないところがある。ほとんど改変するところはないが、次のような訳を試案として提示する：

> また、〔前節の語り手の教友は〕次のように語った。別の時、イーシャーンは、シャードマーン村から町（サマルカンド）へ向かっておられた。鬱々とした状態（qabḍī）から抜け出していなかった。しかし、イーシャーンの祝福されたる唇は動いていた。おそらく、コーランを唱えておられたのであろう。そして、マートリードに行くことを望まれた。マウラーナー・ムハ

ンマドは、“日記書き”と呼ばれており、道化に長けた人であった[11)]。彼は〔イーシャーンの憂鬱を晴らそうと〕お道化て“某という物は、物凄く精力を増強するものだと言われています”と言った。イーシャーンは“放っておいてくれ。マウラーナー・ムハンマドよ。事がここにまで到れば、〔精力増強剤などに頼って悪あがきせず〕女のヴェールでも被って妻の側に座るしかない”とおっしゃった。また、“私は、時に〔一年に〕５ヶ月、６ヶ月もタシュケンドに滞在し、また１ヶ月、２ヶ月とカルシーやブハラやその他の村々に滞在しては巡回する生活をしているにもかかわらず、もし大浄（ghusl）の数を一年の日数より少なくしたら罪になる[12)]”ともおっしゃった。なんと、その時は、イーシャーンの御年は80歳ぐらいであった。

・［川本 2005: 102］に「私は、多くの偉大な人々の〔臨終の〕枕許に立ってきたが、彼が逝ったこの状況において彼らの誰一人思い出さぬ」とあるが、「私は、多くの偉大な人々の〔臨終の〕枕許に立ってきたが、彼が逝った時のようには、誰をも見取らなかった（彼が逝った時と同じくらい悲しい気持ちで見取った人など他にいなかった）」といった具合に訳すべきだろう。

・［川本 2005: 105］に「主におかれては、徹夜での祈りの行におけるコーラン読誦は高い声でするのがより義い。なぜならば、夜の礼拝を行う者について、夜の礼拝のコーラン読誦は高くしなければならないと言われているからである」とある。「主におかれては（makhdūman）」の訳は確定し難いが、以下の訳は次のようにするのが適当かと思う：「徹夜での祈りの行におけるコーラン読誦は高い声でするのがより義い。なぜならば、それ（徹夜の祈り）は夜の礼拝の続きであり、夜の礼拝のコーラン読誦は高い声ですべきであると言われているからである」。

・［川本 2005: 113］に「彼は、彼（ムサーフェル）よりも偉大であるが、当惑の段階には到っていない。彼に何が分かるのか」とあるが、「彼（モッラー・アリー）よりも偉大な者も当惑の段階には到らなかった。彼に何が分かるのか」といった具合に訳すべきだろう。

・［川本 2005: 126］に「二度、三度、彼はこの詩句の説明や解釈を行った。結果、彼から出るものは、全てが彼〔のもの〕ではないということが明らかになった」とあるが、「二度、三度、彼はこの詩句の説明や解釈を行った。毎回〔議論の〕帰着するところは“全ては彼に属すが、全て彼〔そのもの〕ではない”というものであった」といった具合に訳すべきだろう。

以上、卑見を呈したが、いずれも瑣末な事柄ばかりであり、これらが当を得ていたところで、［川本 2005］の有する根本的価値が揺るぐわけではもとよりない。

さて、本評の目的は、［川本 2004］及び［川本 2005］の有用性・出版意義を明らかにして、両書に対する読書諸氏の興味を刺激することであった。が、結局のところ、III 章にて『マカーマート』の史料価値のごく一部について一瞥を加えたに過ぎない。これで目的が達成されたかどうか、いささか心もとない。せめて最後に、断片的ではあるが史料として興味深い記述を特に三つ指摘してお

11）『マカーマート』には他にもこのような人物が出てくる。ホージャ・アフラールの弟子の一人マウラーナー・フサイン・トゥルクは、よく冗談を言ってはホージャ・アフラールを鬱々とした状態（qabḍī）から心楽しい状態（munbasiṭ）に変え、それでホージャに大変重宝がられていたという［川本 2004: 102-104; 川本 2005: 105-108］。マウラーナー・ムハンマドともども、笑いとは無縁の寡黙で生真面目なスーフィーのイメージ（少なくとも評者にとってのイメージはそうである）を修正する、興味深い人物たちである。あるいは、機知に富んだ会話が重んぜられたティムール朝期の上流社会の雰囲気［久保 1990］に感化せられたのであろうか。

12）もちろん、一年間に一年の日数を越える回数の性交をこなしたので、それだけの回数の大浄が必要であった、との謂いである。従って、「浄めの沐浴の回数は、一年の日数と比べてもはるかに多い」という川本氏の訳でも意味は通るのだが、「校訂本のペルシア語表現を、できるだけ忠実に日本語として再現して本文とした」との方針（凡例の２［川本 2005: x］）に従えば、このように訳すのがふさわしかろう。それはともかくも、御年80にしての絶倫ぶりが、奇蹟の一つに数えられているというのは、当時の人々が奇蹟や聖者に対して抱いていた観念を考える上で興味深い。

きたい。勿論、他にも無数にあるが、紙幅の都合上、三つに止めておく。

一つ目は、農地の管理人をめぐるホージャ・アフラールの発言である。すなわち「能力のある盗人の方が能力のない正直者よりはましなのだ。彼（盗人）は、自らのために能力を発揮するが、それはまた私のためにもなる」［川本 2004: 33; 川本 2005: 33］は、ホージャの経営理念に関する貴重な情報を含んでいる。

二つ目は、ホージャ・アフラールが弟子たちを前にしながら、愛息ホージャ・ヤフヤーに対して言った言葉、「ホージャ殿よ、あなただけが私の息子と思ってはならぬ。ホージャ･アブド･アルハーリク様のおっしゃったことに従えば、この者たちも皆私の息子たちであるのだ」［川本 2004: 40; 川本 2005: 41］である。ホージャ・ヤフヤーが実際にホージャ・アフラールの後継者になったことを考えると、世襲に対する弟子たちの嫉妬に気を遣った発言のように思われる。だとすればそれは、スーフィー教団における世襲がどのように認識されていたかという問題と関わってくる。

三つ目は、「彼は、イーシャーン（祖父）に〔木材が彼のものであり、彼が祖父に送ったものであることを〕思い出させないように、全く〔その木材で造られた〕家の天井の方に視線を向けることはなかった。私は、男らしい度量の広さにおいて、彼のような人をほとんど見たことはない」［川本 2004: 73; 川本 2005: 71］という記述である。いわゆる「男らしさ（muruwwa）」の具体的な概念を示すものとして注目される。

ともあれ、『マカーマート』収録の奇蹟譚の数々は、ただ読んでいるだけでも面白いものなので、そういう理由だけからでも、『マカーマート』の一読を是非とも推奨したい。［川本 2005］は、直訳の方針を採っているので、訳文が読みづらいところも多少はあるが、幸い注はしっかり付けられているので、ティムール朝時代の人物や政治的事件に疎くても、内容が理解できるようになっている。ただし聞けば、川本氏の『マカーマート』のペルシア語校訂テキスト及び訳注は残部僅少とのことである。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所におかれては、是非とも増刷を検討して頂きたいものである。

参考文献

今松泰 2006「マウラーナー・シャイフとして知られる弟子編著 川本正知訳注『15 世紀中央アジアの聖者伝ホージャ・アフラールのマカーマート』」『史林』89-6, 105-111 頁 .

川本正知 1986「ホージャ・アフラールとアブー・サイード――ティムール朝における聖者と支配者」『西南アジア研究』25, 25-50 頁 .

――― 2002「ナクシュバンディー教団研究の基礎資料について――(1) ホージャ・アフラール (1404-1490)」『中央アジアにおける共属意識とイスラムに関する歴史的研究』（新免康編、平成 11 年度～ 13 年度科学研究費補助金報告書）.

――― 2004『15 世紀中央アジアの聖者伝 マカーマーテ・ホージャ・アフラール』（マウラーナー・シャイフとして知られる弟子 編著、川本正知 校訂）東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 .

久保一之 1990「ミール・アリー・シールの学芸保護について」『西南アジア研究』32, 21-55 頁 .

濱田正美 2006『東トルキスタン・チャガタイ語聖者伝の研究』（ユーラシア古語文献研究叢書 4）京都大学大学院文学研究科 .

藤井守男 1998『イスラーム神秘主義者列伝』（ファリードゥッディーン･ムハンマド･アッタール 著 ,

藤井守男 訳）国書刊行会 .
Knüppel, Michkael. 2008. *Bibliotheca orientalis* vol. 65 no. 1-2, pp. 229-230.

（中西　竜也　京都学園大学・非常勤講師）

Markaz al-Khalīj li-l-Dirāsāt fī Dār al-Khalīj. 2007. *al-Taqrīr al-Istrātījī al-Khalījī 2006-2007*（湾岸戦略レポート 2006-2007）Sharjah: Dār al-Khalīj. pp. 382.
Gulf Research Center. 2007. *Gulf Yearbook 2006-2007*. Dubai: Gulf Research Center. pp. 536.

湾岸諸国研究や情勢分析に関して有益な資料を２点、書評する。

2003 年のイラク戦争前後から、湾岸諸国の地域的な重要性や注目度が、より一層高まっている。たとえば、イラク情勢やイランの核開発と関係した地域安全保障問題、最近では１バレル 100 米ドルを大きく超えた原油価格、そして政府系ファンドなどが耳目を集めている。こうした状況を広い地域の文脈・関係性の中に読み込むことは、一国研究との相互的な参照の中で新たな示唆を与えてくれる。また、各国において地域情勢をどのように捉えられているのかを理解することも、同様に地域理解の視座を多様化する上で、極めて重要であろう。

今回書評する *al-Taqrīr al-Istrātījī al-Khalījī 2006-2007*（湾岸戦略レポート）および *Gulf Yearbook 2006-2007* の２点は、毎年出版されている湾岸諸国情勢に関する年鑑である。いずれも、地域の研究者が現地報道などの豊富な一次資料を用いて分析しており、的確な情報を提供している。各資料を概観したのち、それぞれの特徴を比較してみたい。

はじめに、『湾岸戦略レポート』について見ていきたい。本書は、UAE のシャルジャ首長国に拠点を置く新聞社のダール・アル＝ハリージ社附属湾岸研究センター（Markaz al-Khalīj li-l-Dirāsāt）から出版されている。管見の限りでは、1999 － 2000 年版から出版されており、基本的な構成は、当該年の GCC 諸国の各国内情勢や域内関係、GCC 諸国＝アラブ諸国関係を分析し、さらに当該年の地域における重要事項を中心に立項・議論を行うものである。2006 － 2007 年版の中心テーマは、湾岸諸国における核開発問題であった。それは、イランがウラン濃縮作業を開始し、国際社会全体に緊張が走った一方で、GCC 諸国も対抗して原子力エネルギーの平和的利用に関する共同開発計画を発表するなど、地域情勢に対して強烈なインパクトを与えたからである。ちなみに、各年の重要事項として、これまで「湾岸と欧州関係」（2005 － 2006 年版）や「湾岸諸国と外交関係」（2002 － 2003 年）などが取り上げられてきた。

2006 － 2007 年版の執筆陣は、下記の通りである。アフマド・イブラーヒーム・マフムード（アフラーム政治・戦略研究センター）、アフマド・キブシー（イエメン大学政治学科）、ジャミール・マタル（開発未来研究アラブセンター）、タラール・アトリースィー（レバノン大学社会学研究所）、ムハンマド・イブラーヒーム・ナクビー（ダール・アル＝ハリージ湾岸研究センター）、ムハンマド・サイード・イドリース（アフラーム政治・戦略研究センター）、ムハンマド・サーディク・フサイニー（イラン問題研究家）、ナザーム・バルカート（ヤルムーク大学政治学科）。

それでは、本書の構成についてみていきたい。

第１章「GCC 諸国 2006 － 2007 年」では、各国の内政・治安・外交・GCC 諸国間関係・地域情